

井伏鱒二全集

第八卷

井伏鱒二全集

第八卷

筑摩書房

井伏鱒二全集第八卷

昭和四十二年九月二十日發行

著 者 井 伏 鱒 二

發行者 竹之内靜雄

東京都千代田區神田小川町二ノ八

發 行 所 筑 摩 書 房

電話東京四七六五一(代表)

振替東京四一一二三

印 刷 株式會社 精興社
製 本 和田製本株式會社

目 次

コタツ花	三
カラス	三二
故篠原陸軍中尉	四
珍品堂主人	一九
柴芽谷部落	二五〇
戦死・戦病死	二七〇
表札	二六八
片割草紙	三〇一
つかぬことを	三三
草野球の球審	三四五
南島風土記	三五九
野犬	三七二
無心狀	三八二
笠雲	三九三

武州鉢形城	四七
-------	----

解題	四七五
----	-----

井伏鱒二全集

第八卷

コタツ花

この夏、二箇月逗留の豫定で、姫川上流の山峽、代場村といふのへ出かけ、焼物製作の窯元のうちで世話になつた。滞在中、これは焼物の話とは關係ないが、「半鐘下の反古傳さ」といふ老人と知合ひになつた。それも、ちよつと親しくなりかけて、その程度までのところで私が代場村を引揚げて來た。忙しいときあひであつたやうな氣持がする。

この反古傳といふ爺さんは、一見ぼさつとしてゐるやうでゐて、谷川の釣が頗る上手であつた。釣の餌に使ふ足長蜂の巢を見つけることも上手であつた。必要に應じて、その場の最寄で造作なく見つけることが出來た。最初、私のために巢を見つけたときも、

「あの、ここぢやあの、お前、蜂の巢が幾らでもあるだからな。」

そんな云ひかたで、わけなく見つけて手馴れたやりかたで取つてくれた。

私が代場村に行つて五日目か六日目のことであつた。散歩がてらに近所の床屋へ出かけると、おかみさん

が棚の花壺に草花を一本々々さしこんでゐた。花びらの形はナデシコに似て、ナデシコと違つて四瓣の朱色の花である。

「綺麗な花ですね。ナデシコの種類ですか」と聞くと、

「コタツバナ」と云つた。

やがて、おかみさんは私の頭の毛を刈りながら、お客さんは川釣の鑑札を買ふ氣はないかと云つた。ここへ毎年避暑に來る或る客から手紙で頼まれて、入漁證を買つて待つてゐたが、この夏は都合が悪くて來れなくなつたと云つてよこしたので、せつかく寶の持ちぐされになつてゐる。理髪代をお負けるから受手になつてもらへないかと云つた。

「しかし、理髪代は理髪代ですよ。それとこれとは別だね。」

私は一應さう云つたが、釣道具なら窯場の職人から借りられるあてがあつたので、入漁證の代金と理髪代を拂つた。「姫川上流漁業協同組合入漁證」といふ鑑札である。入漁期間は四月一日から九月末日までとなつてゐた。

誰でも釣好きな人ならさうだらうが、私は入漁證を手に入れると、これを活用しなくては嘘だといふ氣持になつて來る。指環を嵌めたい女が指環を買へば、藏しまひこんだままにして置けないのと同じことではないか。ともかく、その鑑札を活用するために、窯場の職人から釣道具を借りて、餌は獨り合點で蚯蚓みみずを持つて出かけると、谷川へ下る道ばたに「大國主命」と刻んだ碑があつた。それと並んで道祖神だうそじんと二基の常夜燈が立つてゐた。

私は道祖神と大國主命の碑の刻字を見較べながら立ちどまつた。すると、通りがかりの爺さんが、大國主命の碑に向つてお辭儀をした。それから私を見て、

「ゐたかや。」

と挨拶した。

（後になつてわかつたが、この村での通りすがりに交す挨拶語は、お晝すぎの二時ごろまでは「ゐたかや」である。二時ごろから後は、通りすがりでも人のうちを訪ねても「お疲れ」と云ふ。ずっと目上の人には「お疲れさま」である。ここでは挨拶語が、子供たちの間にもまだ昔のままに残つてゐる。學校歸りの子供たちは、道での別れ際に「あばね」と互ひに云つてゐる。）

この爺さんは釣道具を持つて、たも網を紐で肩へかけ、大型の魚籃うづを腰にさげてゐた。今、川からあがつて來たばかりの、相當年期の入つてゐる釣師と見えた。

「釣れましたか。」

と私は挨拶を兼ねて云つた。

「あの、ちよつと伺ひますが、この邊の川では主に何が釣れますか。」

私のこの質問には、相手の魚籃のなかを見たがつてゐる氣持が籠つてゐる。

相手は誘はれたやうに魚籃を私に見せ、私の餌箱の中身を見た。

「お前、こんなメメズぢや駄目だな。この川には、フナは住まねえよ。あのの、この川の釣は、今なら蜂の子でなくちや仕事になんねえよ。」

魚籃のなかには、濡れたイタドリイタドリの葉をあしらつた下に、大きなヤマメとニジマスが入つてゐた。（この村ではヤマメのことをマスと云ふ。）ニジマスは一尺あまりのが二尾ゐた。

「すごいなあ。冗談ぢやあないよ、全く。失禮ですが、道絲ミチイトの太さはどのくらゐですか。僕のは、道絲ミチイトも鉤かぎも通すして六毛ムスです。」

「それぢや、お前まへ、切られてしまふぢやねえか。おらは道絲ミチイトが二厘、先が一厘半だよ。この下の川ぢやあ、ニジマスが来るからの、手網テコか何か持たなくちやあいけねえよ。」

「放流ハツリウのニジマスでせうね。毎年放流するんですか。」

「や、違ちがふわな。あつこの坂の途中に、あの森の中に、ニジマスの養魚場があるからの。稚魚シヨのうちに流れたやつが川へ出て、羽根ハネを伸ばして食くひ太りしてゐるだからな。手網テコを持たなくちやなんねえよ。いかにもさうだでな。ぢや、御免なすつて。」

爺おやさんは行きかけたが、竿袋から自家製らしい釣竿ツリコを取出して、

「あの、お前まへ、蜂はちの子で釣つてみたらいいよ。ここぢやあね、蜂の巢うが幾らでもあるだからな。」

さう云つて、常夜燈を見上げると、その笠石カサイシに向けて竿の尻シを差し伸ばした。笠石カサイシの裏には足長蜂タシロハチが巢うをかけてゐた。

「この常夜燈の笠には、毎年、蜂が巢うをかけるからの。」

爺おやさんは蜂の巢うの附根ツケのところを、竿の尻シで素早く突いた。蜂が飛びまはるより先に、ぼたりと巢うが常夜燈の臺石ダイシのわきに落ちた。親蜂オハハチたちがその巢うに追ひすがつた。足長蜂の巢うにしては珍しく大型で、親蜂が五

匹も六匹も群がつてゐた。笠石の裏の巢のあつたあたりにも、忙しなげに、きよときよと這ひまはつてゐる親蜂がゐた。

私は蜂を警戒して道祖神を楯に身をかがめた。

「あの、蜂除けのまじなひは、口笛を吹くのが一ばんだぜ。」

爺さんは草むらから去年の枯れ蓬よもぎの長い莖を掻き集め、それを束ねて燃えあがらせたとこで親蜂たちを焼き殺した。枯れ蓬は枯れ藁よりもよく燃えた。煙の匂は、お灸をしてもらふときの匂よりもずっと強烈である。

「お前まへ、この巢をやらずか。」

爺さんは蜂の巢を私の魚籃に入れた。

「それを餌にしたらいいよ。たと釣れや。お前まへ、それからの、ひつこくりにしる紐、持つてゐねかや。」
ひつこくりとは引抜き結びのことだと私は解した。

「持つてますよ。たも網につける紐でよかつたら。」

「それからの、何か切れものを持つてねかや。」

「持つてますよ、登山ナイフ。」

「ちやうどいいぢやねえか。それを、こつちへ貸してくれや。あそこにマムシを目つけたからの、おら。」

爺さんは道祖神の裏にまはつて、ごろた石や流木の轉がり出てゐる岩場の方にちつと目を向けた。岩場の左手に田圃が拓け、岩場と田圃の間に細い野良道が通じ、落葉松の茂つてゐる林で行きどまりになつてゐる。

「見えるが、お前^{まへ}」と爺さんは聲をひそめて云つた。「あつこの、でつかい三角岩の左つ手、平べつたい黒い岩のところ。あの岩の左つ手の方の、あつこの畦道にゐるよ。でえろを巻いてゐるぢやねえか。」

でえろとは、とぐろのことだと知れた。

「どこかしら。しかし、動いて見ればわかるがね。」

「だがの、でえろを巻いたが最後、マムシはなかなか動^動かね。ほかの蛇なら、でえろなんか巻かなんで、メズのやうになつてゐるからの。」

かんかん照りだから岩場が目まぶしくて、それでマムシが私の目につかなかつたらしい。白い雲までもぶしく見えた。林の向うに、遠く高い山が峯を雲で隠して並んでゐる。右から左に、戸隠山、黒姫山、雨飾山といふ順である。

「あのの、マムシは人に目^めつくれたとき、こつちが目を放すと、すぐどつかに行つちまふからな。ほかの蛇よりも、うんと、はしつけえ。だでな、あれを捕る道具、急いで持つて來ざあなんねえよ。あつこの養魚場に預けてあるのを持つて來るからの、おら。」

「ぢや、僕が代りにマムシを見張つてゐることにします。僕の方で目につかなくなつて、マムシの方で、僕が見てゐると思ふだらうな。結果において、僕が見てゐるのと同じですね。」

「へえ、さう云ふがかね。」

爺さんは私の登山ナイフと紐を受取ると、ニジマス^{ニジマス}の養魚場の方へ急いで行つた。

妙なもので、ふと私の目にマムシの姿が見つかった。すぐそこにゐた。距離にして私の足元から十歩と離

れてゐない。畦道にコタツバナの朱色の花が一輪咲いてゐる。そのそばである。とぐろを巻いて、そのうづくまりの中心に鎌首をもたげ、コタツバナが風に揺れても細工物か何かであるやうに身動きしない。横着者だといふ印象を受けた。

この動物は、とぐろ巻いてゐるところが一ばん安定な姿だらうか。一ばん自然で楽な姿勢だらうか。人間なら仰向けに寝ころんだところだらうか。

マムシは爺さんが引返して来るまで動かなかつた。

「どうだの、そのままにしてゐるかの。——や、てえしたもんだ、ゐるぢやあねえか。」

爺さんはマムシ捕の道具を持つてゐた。それは二本の棒である。長さが約九寸、太さが直徑五分ほどで、草刈鎌の柄のやうにつるつるに磨かれてゐる。いづれも棒の先に二股に出た枝が、四分か五分ほどの長さに切り残されてある。ローマ字のYの字の縦棒を、思ひきり長くしたやうな形に出来てゐる。

「お前、もしものがあつたら、いけねえからの。おらがマムシを始末する間、ここで見てゐた方がよくないかや。なまじつか足音に加減して来るよりも、來ねえ方がいいからの。あいつの仲間を、みんな捕つてやるからの、おら。」

爺さんは棒を雙方の手に持ちわけて、その兩方の手のうちに滑りどめの唾を吐きこんだ。それから、一步、拔足差足でなく普通の足どりでコタツバナの方に歩いて行つた。マムシはまだとぐろを巻いてゐる。それに向けて、爺さんの持つた棒の一つが伸びた。

「大丈夫ですかね。」

私はその場へ駆けだした。

爺さんは棒の先の股でマムシの胴を抑へ、もう一つの棒の股で胴をしごいて行つて、首根つ子をぐつと抑へた。そのあたりがマムシの急所であるらしい。

「お前、あぶねえに、そこ退けや。」

蛇の胴や尻尾が暴れまはつた。爺さんはそれを暴れ放題にさしたまま、地面から持ちあげてゐるマムシの口に棒の枝先を銜へさせた。むしろマムシの方から自發的に噛みついた。

「なるほど、さういふ風にして牙を缺くのかね。」

「缺かざあ、ならねえぢやねえか。お前、あぶねえに、そこ退けや。」

爺さんは枝先でマムシの口のなかを捏ねまはした。手荒にしないで、殆どいたはるやうにそろそろと捏ねた。マムシは首から先を除くほか、全身をのたうちまはらせて、胴と尻尾をもつれあはせながら尻尾で地面を叩きつけてゐた。

私の錯覚かもしれないが、胴と尻尾の擦れあふ微かな摩擦音を出してゐた。

「そのマムシは、普通より少し大きいのぢやないかしら。何歳ぐらゐのマムシです。」

「年はわからねえが、こりや子を孕んでゐるでな。」

「マムシの牙は、非常に強靱なんぢやないのかな。その程度に捏ねるだけで、牙が取れるかしら。」

「これの牙は、案外、もういよ。ぢき取れ易いからの。あんまりごちやごちや捏ねりや、蛇ん口んなかに泥が入えつて、賣りものになんねえからの。マムシ一匹、六百五十圓で賣れるぢやねえか。」

マムシはすつかり牙を缺き取られ、ひつこくりの紐で首を縛られて、岩場の三角岩に寄りかかつてゐる流木の枝に宙吊りにされた。尾が胴體に巻きついて互ひによぢれ合つた。もうどんなにもがいても駄目なことをまだ知らない。

「おら、これん腹ん中の子を出すで、どうせ皮を剥いで、お前の切れもので腹を割くからな。切れものは、後で洗つて返すでの。」

「ナイフのことなら、御遠慮なく。しかし、今ここで胎兒を出すんですか。」

「さうだの、ここで出さざあなんねえよ。」

爺さんは宙吊りの蛇を見ながら一ぶくした。

「おらはマムシを捕れば、いつだつて腹子を出してやるだからな。腹子はソーセージのやうに、薄い皮袋に入えつてゐるだでな。ソーセージが二た通りにながつて、一と腹が十二匹といふ子澤山での、てえしたもんだ。十二匹の子が、親の腹ん中で孵つての、その子が親の腹を食ひ破つて出ると云ふちやあねえか。」

「するとマムシの腹には、ちよつとした託兒所の設備があるやうなものですね。」

「さうだの、腹ん中に、チヒサコベノスガルを入れてゐるやうなものだの。」

「ソーセージみたいなものは、どのくらゐの固さです。茄子の漬物ぐらゐの固さですか。」

「そんなに固くはねえよ。さうだの、ぐにやぐにやして、持つても、だらんとするぢやあねえか。」

爺さんの云ふことには、このマムシは生剥ぎにして、肝と剥身は日かげ干しにして賣るのだから、セロフアンか何かにくるんで持ち歸る。ソーセージの方は、どこかこのあたりの落葉の重なつてゐる底に入れて置